

「こちらで待たれてください」は、「こちら	②
らでお待ちください」が一般的な言い方であ	
り、どこか違和感があるので、気になる人が	
多いのは納得できる。しかし、「先生は講義	
がお上手ですね」という言い方は私もあまり	
気にならなかった。考えてみると、この表現	③
は、敬語の使い方としては間違っていないが、	
目上の人を評価するということが敬意を表し	
ていないということになるのだと思う。その	
ため、気になるという意見につながっている	
のではないだろうか。敬語は相手に対して敬	
意を表す言葉なので、言い方や言葉遣いも大	①
切だが、使う場面や相手によっては正しい言	
葉遣いでも失礼になることがあるのだという	
ことに気をつけて使いたい。	

【作文の採点基準】

○指示された条件にしたがって、自分の考えが書かれていること。

○内容について(14点)

- S：以下の①～③のポイントが三つとも十分にまとめられている場合 14点
 A：以下の①～③のポイントのいずれかが不十分である場合 9点
 B：以下の①～③のポイントのいずれか二つが不十分である場合 4点
 C：以下の①～③のポイントがどれも満たされていない場合 0点
- ①主旨・要旨について

・敬語を使う際に気をつけたいと考えること」について、自分の意見が明確に書かれている。

②根拠・例示について

・条件に示されているように、グラフに示された言葉遣いの少なくとも一つを取り上げ、自分の意見につなげている。

③全体の構成について

・選んだ言葉遣いの結果から分析したことが論理的に書かれている。
 ・グラフの分析を通して、自分の意見が筋道立てて導かれている。

○表記について(6点)

以下の①～④の各項目について誤りがあれば、一項目につき、減点1点とする。(それぞれ一箇所につき減点1点とするが、同一の誤りは一箇所とみなす。たとえば、異なる漢字を複数誤っている場合は1点ずつ減点とし、同じ漢字を複数回間違えているものは減点1点とする。)

- ①原稿用紙の使い方に誤りがある。
 ②誤字や脱字があり、漢字が適切に用いられていない。
 ③語句の用法が適切でない。
 ④文の成分の順序や照応が適切でない。

【解説】

1 筆者が「西洋の影響のない日本のなもの」を「西洋見物の途中で考えていた」ことをおさえる。文章の中ごろに「私は西洋見物の途中で日本人の立場を考えたときに、その内容は、国民主義的であった」とあり、筆者が考えた「日本のもの」とは、「国民主義的」なものだったことがわかる。

2 「セザンヌのまね」とは、西洋の影響を受けて、本物のまねをしたもの。「本物のセザンヌ」とは、本物の西洋のものということ。このことをおさえて「西洋の影響が技術的な面を除けば精神の上でも文化の上でもいたって表面的な浅ばくなものにとどまっている」に着目する。そうすれば、「セザンヌのまね」とは、西洋の影響が「表面的な浅ばくなもの」にしかなくていいものであり、「本物のセザンヌ」とは、西洋の本物であるとわかる。

3 英国の文化は「何事も軽薄でなくながい歴史を負っていておちついたものだ」ということである」と説明されている。そして「英国を仏国にとりかえても、およそ同じようなことがいえる」とあることから、英仏両国の文化はイのように「純粋に伝統的なものによって培われている」と言える。

4 本文中の「れ」は受け身。アは自然にそうなるという意味で、自発。イは、市長に對する尊敬を表している。ウは他から作用を受けるという意味で、受け身。エは、そうすることができるという意味で、可能。

5 筆者は日本人も英仏両国のように「文化問題について国民主義的でなければならぬ」という結論に傾いていた。なぜなら、英仏両国には「外国の文化に対する強い好奇心があ」りながら、その好奇心は「自国の文化にとって欠くことのできない原理を外国にもとめるということではなく」、外国と接触しても何も「影響されていないようにみえ」たからである。そのことを「一種の文化的国民主義」として発達しているように感じたのである。この流れをおさえる。

二

1 古典の基本の問題。確実に覚えよう。
 2 まのの長者が、とてもたくさんの布を織らせていたことを誇張して表している。このことから、まのの長者がとても裕福だったことがわかる。
 3 「昔の門の柱のまだ残りたる」に着目する。この柱が川のなかにくさりもしないで四つ立っていたのである。

三

4 アは、「裕福な暮らしは望まずに質素に暮らせれば」という筆者の考えは述べられていない。イは、昔のことが記録に残っているというようなことは述べられていない。ウは、まのの長者に対する筆者の考えとして合っている。エは、「どこまでも幸福を求めて精進すべきだ」という考えは述べられていない。

四

1 性質や態度がやわらかであること。
 (2) 「促」の音読みは「ソク」で「促進」などの熟語がある。
 (3) ほかのことを考えないで、一心に打ちこんでいること。
 (4) もとのものと同じようにつくったもの。「複」と「復」、「製」と「制」を間違えないこと。
 (5) 他人の考えや行動に同感すること。

五

2 アは「幼」稚」で似た意味の漢字を組み合わせた熟語。イは「劇を観る」で下の漢字が上の漢字の目的や対象になっている熟語。「遷都」も「都を遷す」で同様。ウは「日が没する」で主語と述語の関係の熟語。エは「ゆっくりと(漸)進む」で上の漢字が下の漢字を修飾する熟語。

六

1 「括弧に入れる」は、ここではひとまず考えないでおくということ。筆者は「学校に行きたいのにどうしても学校に行けぬと言う高校生が来談した」と仮定して、その高校生に尋ねたいことはいろいろあるのだが、それについては尋ねることはしないで、「ともかくこの高校生の自由な表現をできる限り許容し、それに耳を傾ける態度をとるだろう」と述べている。つまり、ここでの「括弧に入れる」とは表面化させないということである。

2 多くの患者さんたちは「私に対して指導や助言を期待しておられたり」、「原因を早く知れたがったりされる」のだが、筆者は「それらにはほとんど関心を払わない」という態度をとるのだ。筆者がこういう態度をとる理由については「これは、本人および本人を取り巻く人々の、そのときの意志や考えよりも『たましい』の語ることを尊重しようとしているのだ」と述べている。ここからは指定字数に合う部分がないので、同じようなことを述べている「たましいの言語としての『イメージ』を尊重しようとするからに他ならない」に着目する。

3 患者さんは、たとえば「学校のことを問題にするつもりだったのに、『自由に話していたら、知らぬまに母親のことばかり話していたとか、まったく思いがけない過去のことを思い出して話をしてしまった』とか言われる」ようなことになっていたのである。こうなった理由を筆者は「これは治療者が通常の意識レベルにおける原因―結果の論理からフリーになった態度で接しているので、患者の方は知らず知らず感情のおもむくままに話をはじめ、心の深い層へと下降をはじめられるわけである」と述べている。

4 「単純な発想をする」「その人」は、「母親がこの高校生の学校恐怖症の『原因』であると断定し、母親に指導を試みたり」、「子どもを母親から『自立』させようとして、下宿をさせたりする」のである。これらの行動に対して筆者は「この高校生を思いのままに動かそうとしている自分の態度はどう考えられるかなど」ということを「全然反省しない」と批判している。なぜなら、「その人」は高校生を自立させようとして、いろいろなことをするのだが、「その人」の行動は、高校生を自分の思いのままに動かそうとしているのであり、高校生の「心の底に存在する自己治癒の力を妨害」するものだからである。筆者は「このようなとき、母親に会うこともめつたにないし」、「ひたすらこの高校生の話を聴き続ける」のである。筆者がそうするのは高校生の「心の底に存在する自己治癒の力を妨害」しないようにするためである。

七

この作文の中心となるのは、「敬語を使う際に気をつけたいと考えること」についての自分の意見をうまくまとめることである。(1)～(4)の言葉遣いについてグラフからわかることを取り上げ、それについての自分の意見をまとめていくとよい。なぜ気になる人が多いのか少ないのかを自分なりに考えて、意見を出していく。

【二】古文の現代語訳

十七日の早朝に出発する。昔、下総の国に、まのの長者という人が住んでいた。長めの布を千巻、万巻と織らせて、さらさせた(という人)家の跡だといって、深い川を舟で渡る。昔の門の柱がまだ残っていると聞いて、大きな柱が、川のなかに四本立っている。人々が(それを見て)歌をよむのを聞いて、心の中で(こんな歌を作った)、くさりもしない、この川のなかの柱が残っていなかったなら、ここが昔の(長者の家の)跡だとしてわかるだろうか。